四季録

イタリア追想1981 Ⅱ

旅の相棒S君とさらに列車で北上。唯一前もって考えていた、まだ日本ではわずかしか紹介されていなかったジョルジョ・モランディの作品を見るため、ボローニャに行った。

訪ねた近代美術館は何の意匠もない建物で、誰も見に来るものなどいないのではと思うほどに閑散としていた。その一角に、十数点のモランディが静謐さを際立たせて在った。

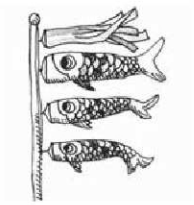
この画家はボローニャをほとんど動かず、おもに身近にある静物を頑固なまでに繰り返し描いた。初めて実物を前にして思ったのは、それでも偏狭に陥っていないということだ。頻繁に使う同じ瓶のモチーフにも、常に新鮮な問題や発見があったのだろう。それを柔軟に支えたのは、自在な筆の流動性にある気がする。静かな落ち着きのある色彩を定着させる、囚われのないしなやかな筆の動きが、揺るぎない密度をも画面にもたらしているのだ。

見ているうちに、手を延ばせば絵の中の空気ごと持ち帰ってもいいような気にさせられる。

イタリア人は一般に、歴史的遺産に関心はあっても、今のものにはさほどでもないのかと旅をしながら思うことがあった。この時、モランディが世を去って17年。ボローニャの人たちには、果たしてどんな存在に映っているのか。

古代ローマ文化があり、さらにはルネサンス美術を生み出した国。記念碑的建造物や、ダヴィンチ、ミケランジェロに群がる観光客を見るにつけ、受け入れるこの国の人々の誇りはいかばかりかと。ついそれらとの落差が反動となって過敏に感じたのかもしれない。

考えてみれば、日本や他の国にも同じことはあるし、やはり歴史の中で淘汰され残ってきたものの強み、力とも言えるのだろう。その後日本でも人気の画家になったモランディだが、今生きて描いているものにもっと目を向けてほしいと思うのは、僕のやっかみか。



イタリア最後の街ベネチアに着き、サンマルコ広場や裏道をぶらつくうちに出くわした、ポール・クレーの展覧会を見た。古い建物内の広い空間を使ってジグザグにパネルを連ね、2階から見下ろすとまるで展示の仕方そのものがクレーの作品のようで、その設営に感心した。絵そのものはいかにも一点一点が完結していて、次につながる隙間が見えず、たいへん美しいのだが少し窮屈だった。

こうやって1週間が過ぎパリに戻った。行きあたりばったり、何もできない僕はただ見たいものをS君に伝え、何でもできる彼がすぐに実現してくれる。2人は名コンビ？　おかげで心置きなくイタリアを満喫。今に続く、友としての始まりの旅にもなった。

（吉田　淳治・画家）

愛媛新聞 :朝刊 2020/05/31 面名:文化 ページ:016
(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。